

平成21年度

文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
《ボランティアを対象とした実践的研修》報告

「地域ボランティアブラッシュアップ講座」 ー地域に密着した入門支援 対話中心の活動を推進するにはー

有限会社 トヤマ・ヤポニカ

代表理事 中河 和子

Email:japonica@fsinet.or.jp

1. 地域の状況

富山県の外国人概況

■ 総人口に占める外国人の割合（H20末）：1.41%
※増加率が高い

■ 生活者の内訳

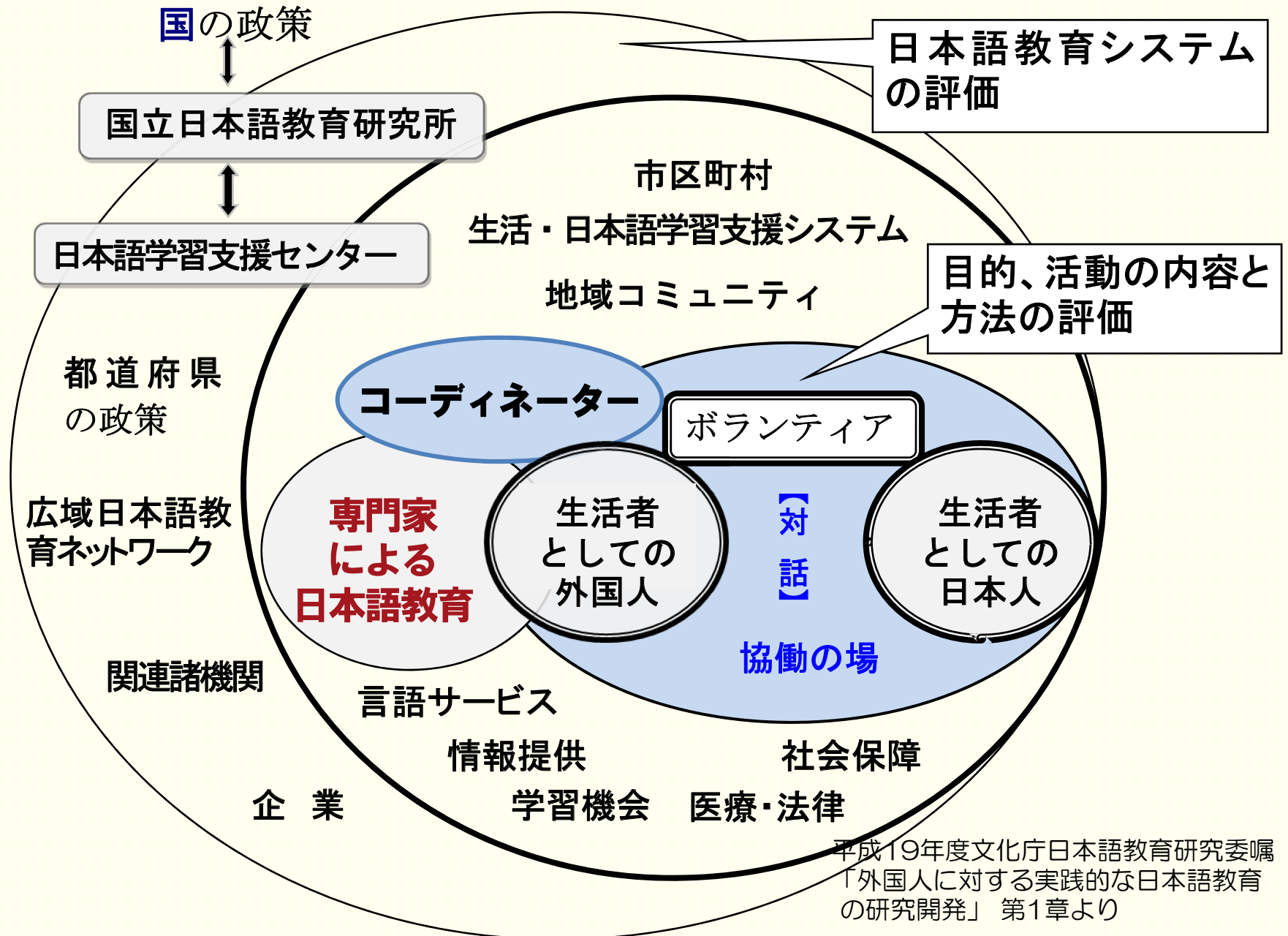
- ・日系ブラジル人労働者
- ・配偶者（中国人・フィリピン人など）
- ・中古車販売業者（パキスタン人など）
- ・技術研修生（中国人など）

日本人市民側の無関心・認識不足



日本人住民との間で大小の摩擦

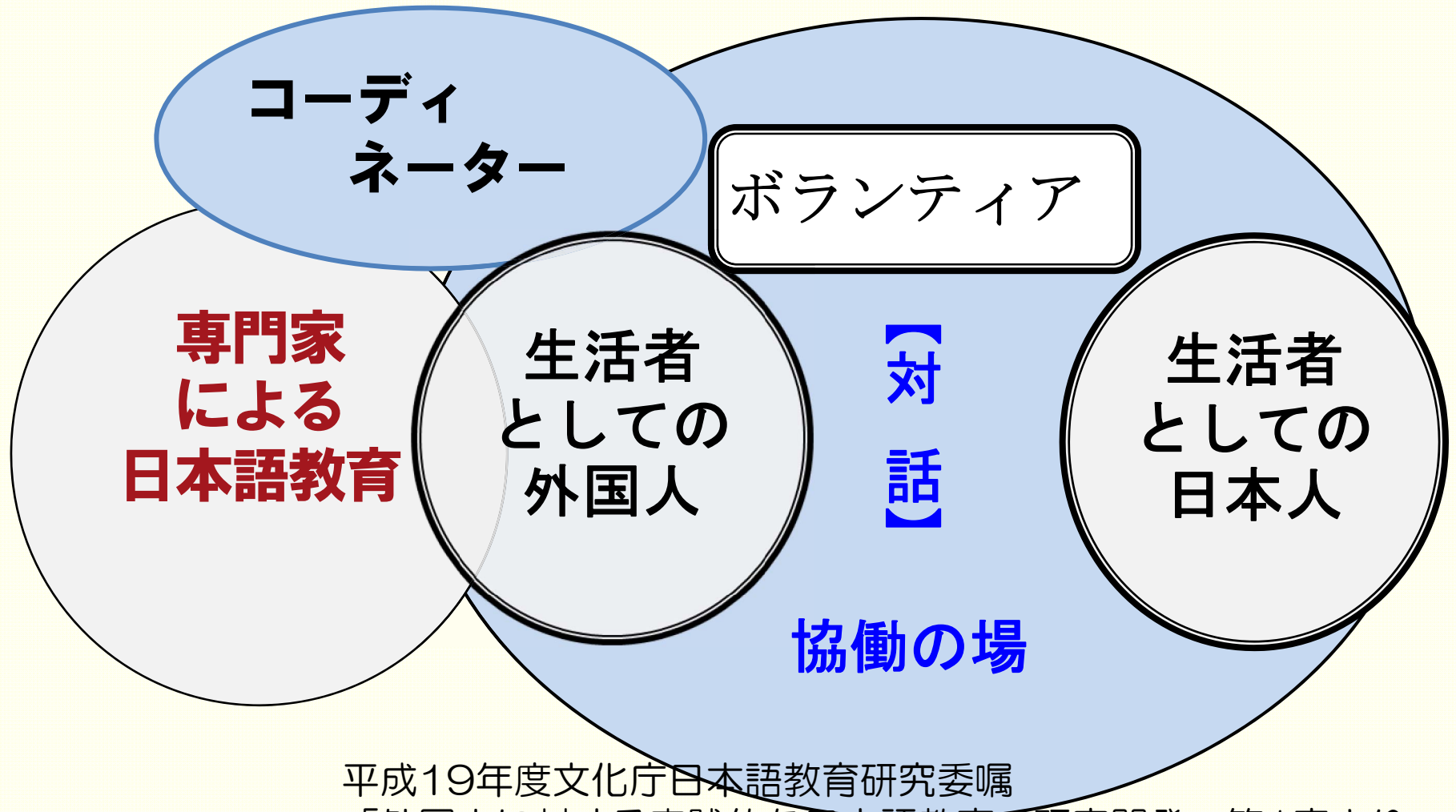
地域日本語教育のシステム図



平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱
「外国人に対する実践的な日本語教育
の研究開発」 第1章より

地域日本語教育のシステム図

地域コミュニティ



平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱

「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」第1章より

地域の教室に求められるもの

■ 地方の特徴

①外国人が散在

⇒ 各地区に地域に密着した教室が必要

②一地域に一教室

⇒教室に複数の役割が要求される

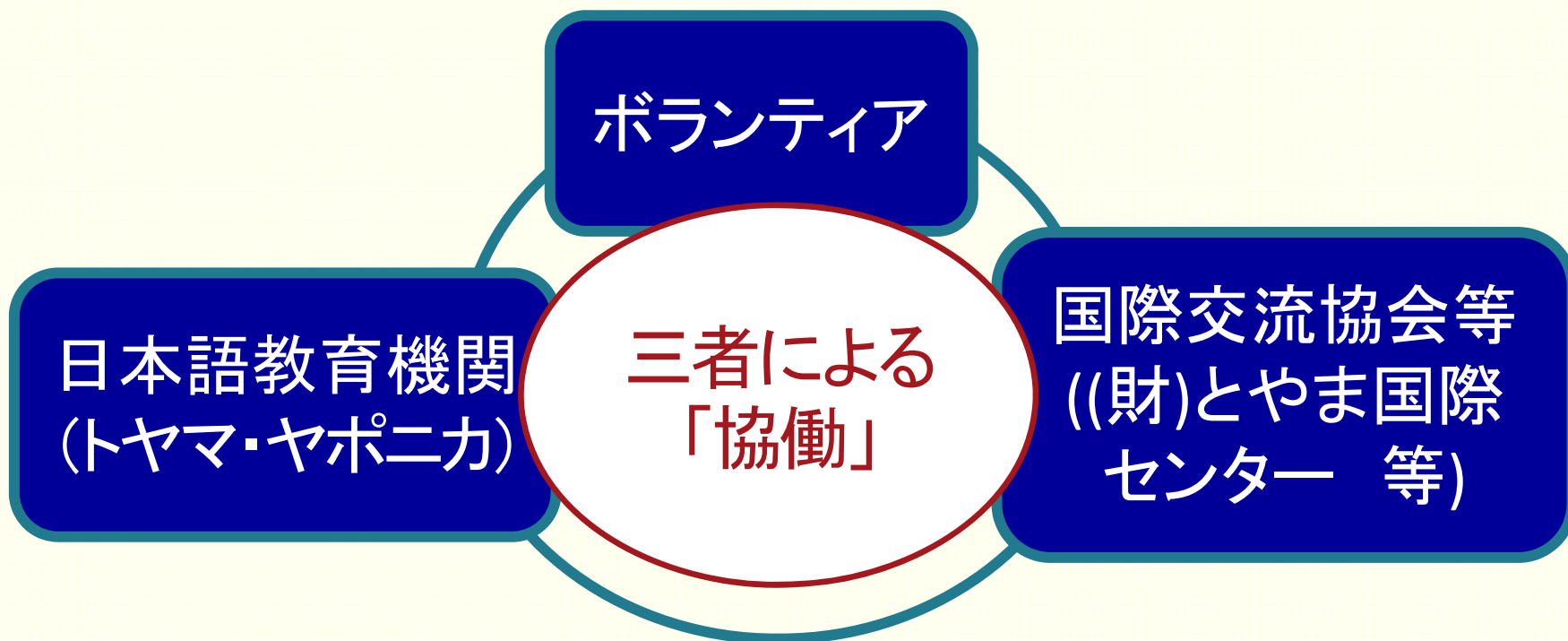


- ・外国人の実効性のある言語習得の場
- ・外国人と日本人の協働による地域づくり

* 自然発生的に教室はできない

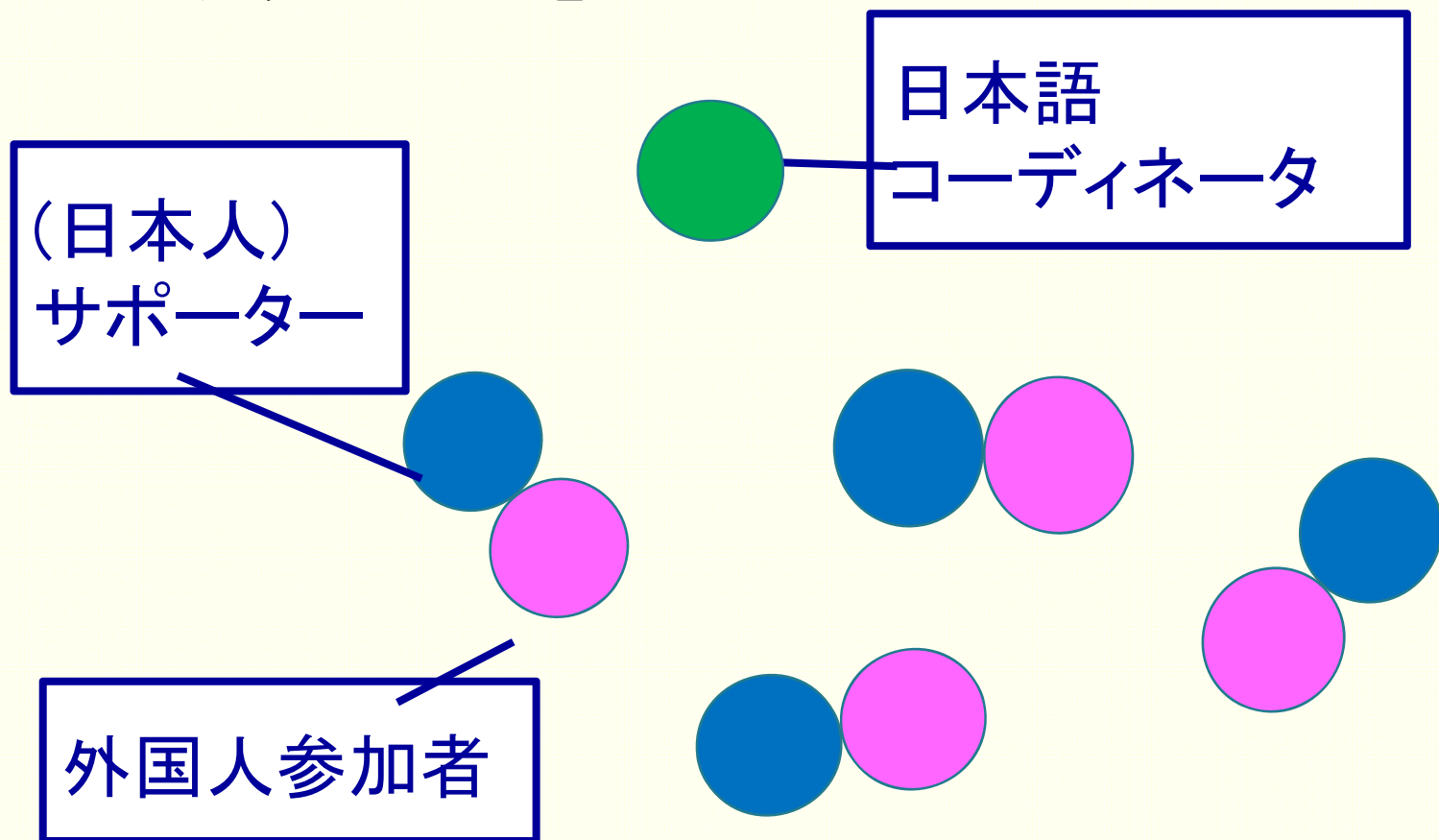
富山県におけるボランティア教室立ち上げ事業

■ 1年間にわたる“OJT”型の
対話活動 ボランティア養成(2004年より)



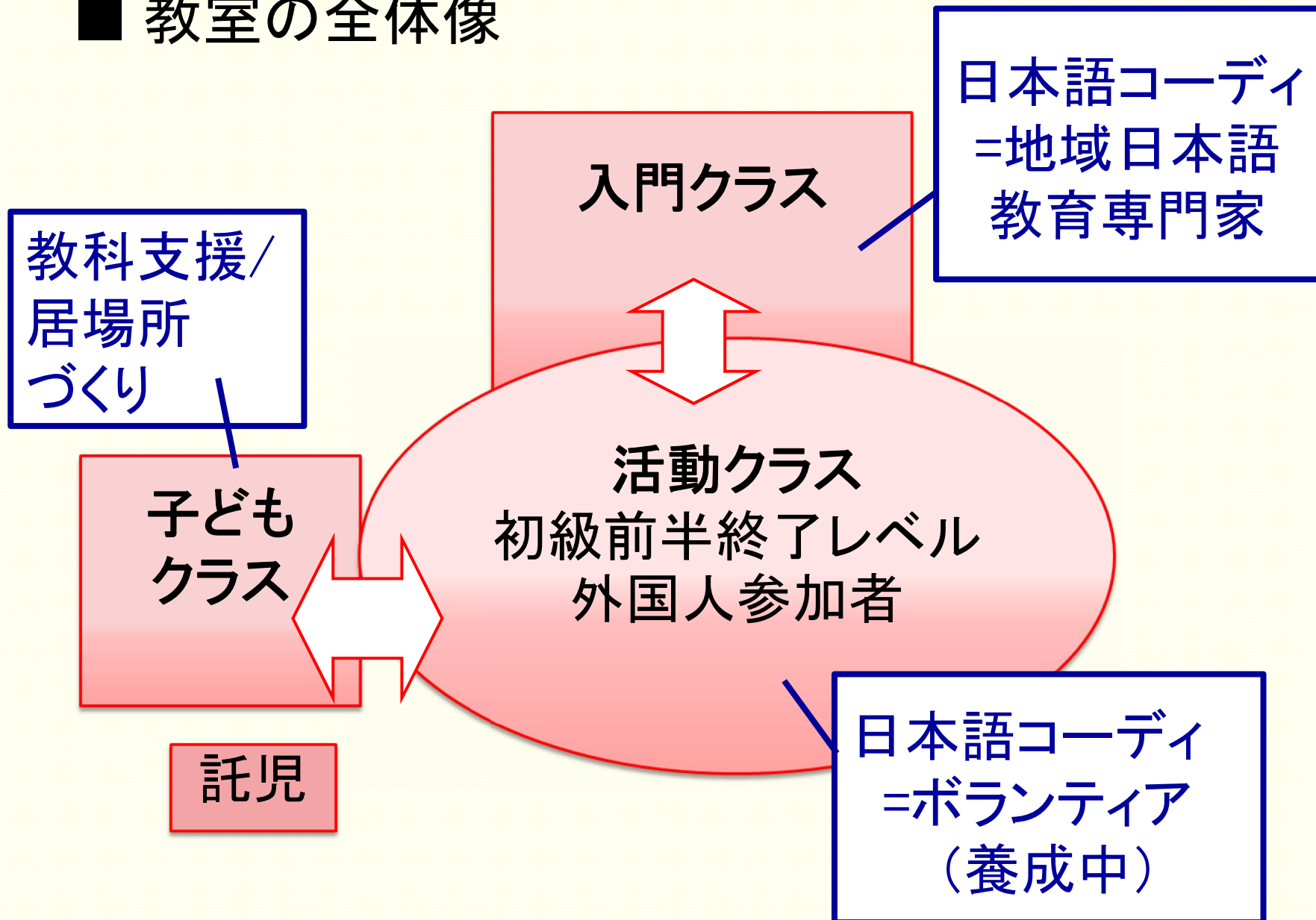
現在、4教室が活動中

■ クラスの形態



教室全体が同じトピックで
対話中心の活動を行う

■ 教室の全体像



■ 活動クラスのシラバス 一例

1	7月5日	伝え合う日本語 他の人の紹介(簡単に)
2	7月12日	進路面談
6	8月23日	あつたいへん！こんなとき、どうする？ 災害に備える(市からの出前講座)
8	9月6日	嫁姑問題
9	9月13日	わたしの生活圏
10	9月27日	近所のひととおしゃべり

2009年 日本語教室in南砺
年間シラバスより 一部抜粋

■ 入門クラスのシラバス 一例

1	5月8日	わたしの家族
2	5月15日	わたしの町
5	6月12日	休みの日
6	6月19日	デートの計画
7	6月26日	わたしのふるさと
12	8月28日	今と昔

2009年 ワイワイにほんご・たいこうやま
年間シラバスより 一部抜粋

■ ボランティア教室に起こる問題

- ① 2年目以降、入門クラスの日本語コーディが必要
- ② 立ち上げから数年を経た教室で
一部のボランティアによる試行錯誤の支援
⇒ 疲弊 ⇒ 教室運営に支障



入門クラスの日本語支援のための訓練が必要



本講座の開講

2. 事業概要

講座内容

■ 回数、時間

全20回（1回3時間 総時間数60時間）

- ・ワークショップを中心とする講義 14回
- ・各ボランティア教室における実習 6回

■ 受講者数 16名（14名修了）

■ シラバス

◇1回～6回 基礎知識

回	内 容
1	地域の日本語支援の新たな方向性【復習】/ 日本語の基本構造・文型の意味1
2	初級者以上と行っていた交流型活動を取り入れる/ 日本語の基本構造・文型の意味2
3	基本構造：動詞のフォーム/交流型会話へ① －名詞文、形容詞文、動詞文を意識して
4	交流型会話へ② －動詞のフォームを用いた文型を意識して1
5	交流型会話へ③ －動詞のフォームを用いた文型を意識して2／ －複文を意識して1
6	交流型会話へ④－複文を意識して2

◇ 7回～12回 実習に向けて

7	入門クラスでの交流型会話
8	交流型会話のコツ①一言語形式を中心に
9	交流型会話のコツ②自分の対話をふり返る/ 話題の展開それを支えるもの
10	地域の入門日本語教室での活動ー活動の一方法
11	地域の入門日本語教室での活動ー実習に向けて①
12	地域の入門日本語教室での活動ー実習に向けて②

◇ 13回～18回 実習

太閤山、氷見、黒部で 各2回

◇ 19回20回 来年度に向けて

講座の特徴

- 受講生全員が対話中心活動の経験者
- 実習を所属教室で実施
 - ←講師・ボラ・外国人に信頼関係
 - ←協働的な実習が実現
- 多文化共生意識(＝対話中心活動に必須)
の醸成を繰り返し促す

講座の目標

- ① 日本語がほとんどできない外国人と
楽しんで対話を継続する活動ができる
人材の育成
- ② 1:1~2の活動において対話中心の活動に
よる初期日本語指導(相手に構造を意識化さ
せ、蓄積していく指導)ができる人材の育成
- ③ 初期の対話中心の活動が推進できる
日本語コーディネータとなる人材の発掘

講座の目標

- ④ 県内の教室が、接触・交流を通して
問題が解決できる運営方法を学ぶ場の提供

講座の成果1 ー多くの受講生が達成

目標①

日本語がほとんどできない外国人参加者と
対話を継続できる＋楽しめる



※約半数の受講生

講座の最低限の目標の達成



多文化共生意識の醸成が一層進んだ

目標③

各教室間の交流による問題解決

講座の成果2 ーごく少数の受講生が達成

目標②

1:1の対話中心活動による初期日本語指導
ができる（十分なものではないが）

目標③

初期日本語クラスの日本語コーディネータの発掘
→②の人材と重なるが、更なる研修の機会が必要

しかし、立場が保障されていない

3. 課題と今後の展望

課題1

「日本語の構造を意識化させる」ことを
多くの人はできない

原因：幅広い言語教育の素養が必要
実習回数の不足



地域の教室へのアドバイザー派遣制度活用

※(財)とやま国際センター, 富山県による

課題2

「対話を楽しむ」 ⇔ 「構造を意識化させる＝指導」

両立の難しさ, 危うさ



今までの“よい関係”が阻害されるのでは？

その一方で

入門段階で「指導」を意識しない活動



日本語力の上達につながりにくいのでは？

今後の展望

対話中心＋初期日本語指導



ボランティアに大きな負担と責任を課す
対等な関係が成立しにくい



初期指導の公的保障のための環境整備が必要

地域日本語教育の専門家
≡ 日本語コーディネータ



効率的実効性のある
言語学習の保障

ボランティア

「対話中心の活動」
による人間関係構築



地域づくり

協働

若干修正：地域日本語教育のシステム図

地域コミュニティ

